サバイバル家族

第4回　自力と自転車と現代医療

人工物に頼らずに独自の方法で登山を続けるサバイバル登山家・服部文祥さん。日常でも現代文明に頼らない暮らしをしていますが、時には葛藤がうまれるようです。

服部文祥　サバイバル登山家

はっとり・ぶんしょう／登山家。作家。山岳雑誌『岳人』編集者。1969年横浜生まれ、在住。94年東京都立大学フランス文学科卒（ワンダーフォーゲル部）。高いレベルで登山を実践し、96年世界第2位の高峰K2（8611m）登頂。99年から長期山行に装備と食料を極力持ち込まず、食料を現地調達する「サバイバル登山」を始める。著書に、『サバイバル登山入門』や『アーバンサバイバル入門』（ともにデコ）、『サバイバル登山家』（みすず書房）など。小説『息子と狩猟に』（新潮社）が第31回三島由紀夫賞候補作に。

五歳の玄次郎が布団に横たわり、灰色の顔で喘いでいた。11年前の話である。

玄次郎は喘息持ちで、昨年の同じ時期にも入院していた。そんな玄次郎に対して私は「よわっちい」とか「やわだ」などということをときどき口にしてしまっていた。父親（私）が現代医療や現代文明に否定的であることを、幼いながらに感じていたようで、玄次郎は玄次郎なりに病院には行かずに、自分で窮地を乗り切ろうとしているようだった。

だがそれもここまでだと私は思った。玄次郎が（たとえ命賭けでも）現代医療を否定するというなら尊重する。だが五歳の子どもがそれほど強固な主義主張を持っているとは思えない。

「このままじゃ死ぬかもしれない。いやかもしれないけど病院に行こう」と私は玄次郎に声をかけた。

「まだ、だいじょうぶだとおもうけど」と玄次郎は喘ぎながら言った。でも言いながら少し安心したようだった。

山に登ったり、できるだけ自力で生活しようとしたりしているので、現代文明はちょっと行き過ぎだと思っている。治安と公共衛生と飽食はすばらしい。だが、それとひきかえにシステムで固められた社会は単純につまらない。自分が自由な野生動物ではなく、家畜になっているような気がしてしまう。

同じように考えて、国家や政府、一般社会の価値観を否定して、自分たちで楽しく生きようとしている人たちがいる。パーマカルチャーやヒッピー共同体、独自のユートピアを目指す農耕集団などなど。自立を目指すそれらの人々は格好いい。だが、子どもの医療はどうしているのだろう。

現在アラフィフの私自身に、もう医療はいらない。充分とは言えないがそこそこ生きてきた。高度医療を受けてまで生きるつもりはない。だがもし幼い子どもにまで文明否定を押し付け、現代医療から遠ざけたらそれは虐待ではないのか。もっと自分の気持ちに正直になるなら、私が本当に恐れていたのは、子どもが死ぬこと以上に、子どもの死を体験すること以上に子どもが死ぬことは堪え難い。

命は常に死というリスクをはらんでいる。人の親になるとは、自分の子どもの死を受け入れる覚悟を持つことだ、と思っている。思っているが、そんな体験をしたら、死ぬまで癒えないダメージを受けることも同時に確かなこととして感じられる。

私は玄次郎に言った。

「横浜労災の救急に行く。方法は三つある。救急車を呼ぶ、タクシーで行く、俺の自転車のうしろに乗って行く」

横で聞いていた妻が「自転車で行くなんてあるわけないでしょ」と目を吊り上げた。

私は車を所有したことがない。自家用車は便利だが、値段や維持費に見合うほどの価値はない。石油文明に対する異議表明という意味合いもある。そのかわり自転車は常に五台前後所有してきた。海外の有名メーカーの自転車もあり、ガレージに外車が数台あるというのは私の定番のジョークだ。自転車も道路も現代文明の結晶である。だが動力が自力、エネルギーが化石燃料ではなく再生可能なゴハンであるというところに自転車の確固たる思想的価値がある（だから電動アシスト自転車は思想的に自転車ではない）。

自転車で行けるところ、自転車で運べるものというのを、私は自力の限界値と定めている。それ以上の移動や物質の所有に際しては、いったん立ち止まって考えるのが自己規律だ。

「ヒロシ（※）に頼んで車を出してもらうっていう手もある。でも、できれば救急車や他の家の車は頼みたくない。タクシーか自転車、どっちかで行けるか」

「自転車で行く」と玄次郎は言った。自力にこだわった……わけではない、と思う。調子が悪い状態でタクシーなんか乗ったらもっとひどいことになると思っただけだろう。

「自転車が一番早い。玄次郎も自転車がいいって」と私は妻に言った。私の自転車は子どもを二人乗せられるように改造してあった。ベトナムやマダガスカル、アイルランドを旅したマウンテンバイクである。

玄次郎に厚着をさせ、さらに私の綿入り袢纏で包んで、自転車のうしろに乗せた。

できるだけ滑らかな運転で、震動を与えないように、慎重に自転車を漕いだ。

これが最善の方法だ。そう思いながらどこかで、自己満足のために病気の子どもに無理をさせているかもしれない、という怖れをぬぐい去れないでいた。玄次郎の命は揺れ動いている。それが時間の流れを意識させる。もしものときに後悔しないためには、一瞬一瞬、最善を積み重ねて行くしかない。だが、そもそも何が最善かがわからない。自分がどこかで間違えていないか、ぐるぐるぐるぐる無意味な検証だけが頭を回る。

結局、玄次郎はそのまま入院し、後日、みんなで見舞いに行った。移動手段はもちろん自転車である。当時小学一年生だった祥太郎は二〇インチのスペシャライズド（外車）に乗り、二歳だった秋は、私のうしろに乗った。小児病棟は子どもの立ち入りが禁止されているので、打ち合わせどおり病院の裏に回ると、妻と玄次郎がベランダに出てきて「おーい」と手を振った。

「おーい」私と祥太郎も手を振った。

秋は「ゲンちゃんどうしてあそこにいるの？」とつぶやいていた。

イラスト：服部小雪

今月のサバイバル

博多でのトークショーにチョッキ銛をもって行き、長崎に住む親戚の家へ。カワハギが産卵でたっぷり浅場にきているだろうと予想していたのだが、お留守。突き仲間があつらえてくれたカーボン製の銛とカーボン製のロングフィンという出で立ちは、いかにも玄人だが、中身の突き人は素人。カワハギがいなければ私が突けるのは、鈍臭いナベタ（イラ、うまい）だけです。とほほ。

（※）近所の友人。ワンボックス車所有